

---

Love W

みねお涼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Love

### 【ZPDF】

Z7222Y

### 【作者名】

みねお涼

### 【あらすじ】

トールには秘密があった。

彼氏として付き合っていくには、とても重大な秘密が。

トールの秘密を知るユキは、彼女として日々その秘密に振り回されることになるのだが……。

## 第1話（前書き）

少女漫画のノリで書いてます。  
細かい描写がありませんので、『了承ください』。

午後の空気は、夕焼けの熱を孕んでまだ暑い。秋の足音はすぐ後ろで足踏みしたまま、強い日光が大地の温度を上昇させる。

うだるような熱気は、コンクリートとアスファルト。そしてエアコンの室外機のなせる技か。

そんな日差しの中、授業を終えた学生達が校門を後にする。磨き上げられた校門の門柱は、丁度言い具合に公孫樹の日陰に入っていた。

一人の男子生徒が「第一高等学校」と名の刻まれた門に寄りかかって、ハードカバーの本に視線を落としている。しばらくして、部活動生と受験を控えた3年生達を残す校舎内から、少女は駆け出してきた。

走り寄る少女が、声をかける。

「トール」

呼びかけられた少年は顔を上げ、かけていた眼鏡のブリッジを持ち上げた。

「おそいよユキちゃん」

言葉では少女を非難しながら、微笑で迎える。

2人は一緒に歩き出した。

堤ユキと井出トールのデートは決まって放課後。

自宅へ帰るまでの、20分たらず。

でも、それが毎日の楽しみだった。

楽しそうに談笑する2人の死角から、一台の自転車が近づいていた。

彼女達が、その危険に気付いた時には、既に回避できない状況で。

「危な……！」

自転車に気付いたトールは、咄嗟にユキをかばつた。しかし、カバンが自転車のハンドルに引っ掛けたり、トールの体を強く回転させた。

「ゴン！」

横転し、学校の塀に強く頭を打ち付けてしまったようだ。

「トール！」

ユキは、しゃがみこんで声をかける。身じろぎしないトールの様子を見て、自転車に乗っていた人が、救急車を呼ぼうと携帯を取り出すが。

「ごめんなさい！ 救急車……！」

直後、トールはむづくりと起きあがつた。

「いらぬえよ、そんなん」

トールには、秘密があつた。

「だつせえ……」

トールはそう言い、手櫛で髪を書き上げる。

整髪料もつけていない、清潔な黒髪が乱れる。

その言葉遣いといい、雰囲気といい、直前までのトールであつた人物は、何かが変わつていた。

「……ケイ？」

ユキは、恐る恐るトールのことをそう呼んだ。

ケイ、と。

「オレ、ちょっと行つてくるからこれよろしくね  
トール…いや、「ケイ」は、不敵に笑いながら手にしていた学生か  
ばんをユキに放り投げた。

「ちょっと…、待ちなさいよ！」

歩き出そうとするケイに、ユキは強気に声をかける。  
中身がトールでないのなら、ユキもそれなりの態度を取る。  
振りかえり、じつとユキを見つめるケイ。

「僕を止めたかったら…」

睨み付けるユキに、ケイはにじり寄つた。そして、顔を近づけてぼ  
そりと。

「オレにキスしてよ」

そう挑発してやる。

ケイには、ユキとトールがまだ清い仲だと分かっている。  
だから、そんなことを言われて顔を赤らめるユキを見るのが楽しい。

「…」

無言のユキと自転車の人には背を向け、ケイは歩き出した。

秘密。

トールは、二重人格なのだ。

【Love W】

ユキは、茫然と自分の前から消えるケイを見つめていた。

自転車の持ち主も、わけがわからず中途半端な位置に携帯電話を掲げたまま。

トールが意識を失うと、ケイは表に出てくる。

品行方正、成績優秀なトルに対し、乱暴暴虐、天真爛漫なケイと  
いう人格が生まれたのは、必然なのか…

なんにせよ。

この事態は、付き合い始めた頃から事情を知るユキにとって大きな心配の種であった。

外にはもう、人工の明かりしか灯っていない時間。  
ユキは、机に向かい勉強していた。

二二〇

窓に、何かが当たる音。2階の自室のカーテンを開くと、一人の若者が道路に立つてっこり微笑んでいる。

(トール?)

「おこ、オレの荷物は？」

(… なわけないよね)

その言葉遣いから、男の意識がガトールでないと悟りがくつときた。そんなユキを無視し、ケイは勝手に部屋に入つてくる。器用にも、雨どいをつたつてである。

「あんたのじやないでしょ? ちょっと一ヶ月はゆうか入らないでよ」

「氣にするなって！あー疲れた」  
ベッドに倒れこむケイ。その傷だらけの体を見て、

「もう！またケンカなの！？」

ユキは呆れた様に、しかしきちんと声をひそめて注意する。  
一人娘の部屋に、意図も簡単に男が侵入しているなどと知られては  
まずい。

だが、ケイの反応は返つてこない。しんとする室内。  
ケイは、静かに寝息を立てていた。

「…もう寝てる。…ん？」

大きく肩を上下させたユキは、見つけてしまった。  
ケイのシャツがはだけている。その下にある、大きな傷痕を。  
(まさか、ケイ…。危ない事してないよね?)

その傷は、ケイの下腹部を右下から左の肋骨の下までを大きく横断  
していた。

傷自体はだいぶ古いものようだ。

(そう言えば、水泳の授業…出てないけど、コレのせい?)

もちろん清い仲の二人である。

ユキが、ケイの…トールの体に刻まれたその傷を見たのは、初めて  
のことだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7222y/>

---

Love W

2011年11月21日16時44分発行